出エジプト記34章 「主のご臨在に触れて」

1A 再び用意する石の板 1－4
2A 御名の宣言 5－9
3A 主の再契約 10－28
　1C 住民との契約 10－17
　2C 主への三大祭り 18－26
　3C ご臨在に触れたモーセ 27－28
4A 顔からの輝き 29－35

本文

出エジプト記 34 章に入ります。私たちの学びは、モーセがシナイ山で、主のことばを受け取っていたのに、麓で民が金の子牛の周りで乱れていたところに入っています。モーセが戻って来て、主がご自分の指で書かれた言葉の記されている石の板をこなごなに壊して、金の子牛を壊し、その粉末を水に入れて、イスラエル人に飲ませたというところも読みました。それから、まだ乱れている者たちがいたので、レビ人が立ち上がり、兄弟、家族であっても、悔い改めない者たちを殺していきました。モーセは、嘆き悲しみながら主の前に出て、もしできますならば、自分の名前を神の書物から消し去ってくださいとまでお願いしました。彼らが滅びることを願わなかったのです。

主は、そんな必要はないということで、わたしではなく、使いが先に行って、約束の地に入る時も使いが行く。わたしが共にいると、彼らが滅んでしまうので、行かないと言われていました。民はすでにエジプトから持ってきた異教の飾り物を身に着けていませんでした。自分たちのしたことが、いかに悪いことであるかを悟り、その罪を悲しんでいたのです。そして主が共におられないことを悲しみました。モーセは、会見の天幕で主に対して嘆願しました。あなたが行ってくださらなかったのなら、ここから導き上らせないでくださいとまで言いました。主は、その願いを聞いてくださいました。こうして、次第に主とイスラエルの民との関係が修復しています。民がなんとか、神の憐れみによって罪から立ち上がろうとしています。

それで、モーセは、民のためではなく、自分のための願いを出しました。「33:18 どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」このことも主が願いを聞き入れられますが、けれども、主の御顔を見て、それでまだ生きていることはできないから、岩の裂け目にあなたを入れて、私が通り過ぎるまでそこに入れ、わたしが手を取り除けると、後ろ姿だけあなたは見ることになると言われました。34 章は、モーセが再びシナイ山に上り、主のご栄光の姿を見て、そこにある神の憐れみ、イスラエルへの思い、そして再び契約を結んでくださる姿を見ます。私たちが罪を犯してしまいます。それは、神の民とされたキリスト者とて同じです。そこから、罪の痛みを味わい、しかし立ち直り、そし

て神のご臨在の中で回復するという姿を見ます。

1A　再び用意する石の板　１－４

1【主】はモーセに言われた。「前のものと同じような二枚の石の板を切り取れ。わたしはその石の板の上に、あなたが砕いたこの前の石の板にあった、あのことばを書き記す。2 朝までに準備をし、朝シナイ山に登って、その山の頂でわたしの前に立て。3 だれも、あなたと一緒に登ってはならない。また、だれも、山のどこにも人影があってはならない。また、羊でも牛でも、その山のふもとで草を食べていてはならない。」4 そこで、モーセは前のものと同じような二枚の石の板を切り取り、翌朝早く、【主】が命じられたとおりにシナイ山に登った。彼は手に二枚の石の板を持っていた。

罪を犯したことによって、主のみことばが台無しにされました。主のことばが損なわれたことを、モーセは、石の板をこなごなに壊すことによって示しましたが、主は再び、主の契約の中で生きることを約束してくださいました。またこれは、主のことばは、私たちが違反したからといって、それで無効にされるというものではないことを示しています。主の真実なことばは、私たちが失敗しても、それでも耐久することを示しています。

モーセが朝にシナイ山に登るにあたって、だれも一緒に登ってはならない、人影があってはならない、また、家畜もその麓で食べてはならない、と言われるのは、それが聖なる神がそこにおられるということをはっきりさせるためです。初めにモーセがシナイ山に登ろうとした時に、人々が押し寄せてきました。そこで、主がまだ聖なる方であることの意識が薄かったのだと思われます。それで、罪を犯してしまったのです。私たちの霊的成長は、この、主の聖さをどれだけ意識しているかにかかっているかもしれません。

2A　御名の宣言　５－９

5【主】は雲の中にあって降りて来られ、 彼とともにそこに立って、【主】の名を宣言された。6【主】は彼の前を通り過ぎるとき、こう宣言された。「【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神。怒るのに遅く、恵みとまことに富み、7 恵みを千代まで保ち、咎と背きと罪を赦す。しかし、罰すべき者を必ず罰して、父の咎を子に、さらに子の子に、三代、四代に報いる者である。」

主は、ご自分の名でご自身の栄光を表しました。聖書では人の名前は、その人生をよく表しています。例えば、モーセは「引き出す」という意味のヘブル語が派生したものです。苦境や圧迫の中にいる人々をそこから引き出すということです。そしてここでは、神がご自分の名を宣言しておられます。とても長い名前ですが、これが神の性質と特徴の中心になっています。旧約聖書から抱かれがちな、厳しく恐ろしい神というイメージとは裏腹に、これほどまでに憐れみに満ちた方でありました。「33:19 わたし自身、わたしのあらゆる良きものをあなたの前に通らせ、【主】の名であなたの

前に宣言する。」と言われていましたが、あらゆる良きものに満ちたお方であります。

聖書では、ここにある主の御名が、何度となく祈りの中や、約束の中で出てきます。例えば、ユダの国のヒゼキヤ王は、アッシリアによって滅ぼされた北イスラエルに行き、そこに残っている民に対してこう言いました。「Ⅱ歴代 30:9 もしあなたがたが【主】に立ち返るなら、あなたがたの兄弟や子たちは、彼らを捕虜にした人々のあわれみを受け、この地に帰って来るでしょう。あなたがたの神、【主】は恵み深く、あわれみ深い方であり、あなたがたが主に立ち返るなら、あなたがたから御顔を背けられることはありません。」彼らが主に立ち上がりさえすれば、いつでも彼らはイスラエルの地に帰還できたのです。

預言者ヨナは、そのアッシリアのニネベに行って預言しました。「もう四十日すると、ニネベは滅びる。」と宣言したのです。ところが王を始めとして、民全体が必死になって祈り、悔い改め、神の憐れみを請いました。すると、神は滅ぼすのを思い直されたのです。それでヨナは怒りました。こう言っています。「ヨナ 4:2 ああ、【主】よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへ逃れようとしたのです。あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわいを思い直される方であることを知っていたからです。」ヨナは初め、主の命令に聞き従わないでニネベではなく、タルシシュに向かおうとしたのですが、それは、主がニネベを赦されるに違いないと思っていたからです！

そして詩篇には、数多くの祈りと讃美の中で、主の憐れみに富んだ姿を述べています。例えば 86 篇には、「86:4-5 このしもべのたましいを喜ばせてください。主よ私のたましいはあなたを仰ぎ求めています。主よまことにあなたはいつくしみ深く赦しに富みあなたを呼び求める者すべてに恵み豊かであられます。」とあります。そして新約聖書において、旧約時代に律法や預言者によって示されていた神のご性質が、イエス・キリストによって実現したことを宣言しています。ヨハネ 1 章 17 節です。「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」

初めに「【主】、【主】は」でありますが、「ヤハウェ」です。この方は、「わたしは、『わたしはある』というものである。」と言われました。たとえこの天地がなくなろうとも、なお存在している永遠の方です。かつ、ヤハウェには「何々になる」という意味があります。つまり、私たち神の民に必要があれば、その必要になってくださる、ということです。私たちが悲しめば、主がその悲しみをもって共に悲しんでくださり、慰めとなってくださいます。私たちが不安になれば、主はその不安をすべて引き取って、平安を与えてくださいます。この中に悪と不正を見て絶望してしまいそうになるときには、主が正義となってくださって希望を与えてくださいます。

次は、「あわれみ深」い、です。このヘブル語の元々は母親の胎を表しています。母が子の痛み

を感じて、自分の痛みとして受け取るように、神はご自分の子が刑罰によって痛むことを何にもまして苦しみます。できるものなら、何とかして取り除きたいと願います。したがって、民が主に立ち返りさえするならば、主はその怒りの手をすぐさま引いてくださるのです。そして、憐れみは、私たちが当然受けるべき処罰を受けなくてもよいようにしてくださる神の感情です。詩篇の中にはダビデが、絶えず「あわれんでください」と神に祈り求めています。たとえ、特定の罪を犯していないとしても、自分が悩んでいるとき、病の時、敵に囲まれている時、彼はそう祈り求めました。私たちの存在そのものが、神の憐れみに拠り頼んでいるからです。

次に、「情け深い神」とあります。このヘブル語の元々の意味は、「身の低い人にかがむ」という意味合いがあります。つまり、単に同情するのではなく、実際に助けの手を差し伸べるのです。英語では、そのため grace という言葉で訳しています。単に処罰を控えるだけではなく、助けによって、救いによって、その恵みを受ける、ということです。ですから、私たちは、かろうじて地獄から救われた存在だけではありません。地獄から救われただけではなく、神の御国に入るように豊かに救われました。

そして、「怒るのに遅」い方です。英語では”longsuffering”であり、「長いこと耐え忍ぶ」という意味があります。忍耐して、ご自分の怒りを下らせるのをとどまらせておられる方です。人がたとえ何年もイエス様を信じなくても、それでもキリストにその人が来るように待って、耐え忍んでいてくださいます。私たちが罪の問題を克服できなくても、克服できる時まで待ってくださるのが神です。そして、たとえ悪がはびこっていても、それに対する怒りを遅らせるのが神です。このことから、「神は悪を是認しているのだ。神は悪に対して無力だ。」と勘違いする人たちがいます。けれども、神は裁きを行わないでいるのではなく、必ず裁かれます。けれども、待っておられるのです。

そして「恵みとまことに富み」と言われました。これは、そのまま「神の一方的な好意」である恵みと、そして真実という意味です。神は、私たちをいつまでも良く見てくださっています。それは真実で変わることはありません。ヨハネ１章にある、イエス様の説明はまさにこれが実現した方であり、「恵みとまことはイエス・キリストによって実現したから」とあります。

そして、「恵みを千代まで保ち、咎と背きと罪を赦す。」とあります。考えてもみてください、恵みが、罪の赦しが千代にまで続きます。これは無限に続く、ということです。赦しが永遠なのです。自分が犯した罪が、数年後に掘り起こされるということではないのです。天に入ったら、地上で行った罪が映画館の画面にように、鮮やかに映し出されると言った人がいるようですが、とんでもないことです！イザヤ書には、雪のように、羊毛のように白くなると宣言されています。

そして最後に、「罰すべき者を必ず罰して、父の咎を子に、さらに子の子に、三代、四代に報いる者である。」とあります。再び人間というのは不思議なもので、このことばかりに集中して、「やは

り神は不公平だ。息子、孫にまで、親の罪に対して連帯責任を取らせるのか。」と言います。他の膨大な聖書箇所で、それを真っ向から否定しています。これは千代の恵みと比較しているのです。つまり、三代、四代、というのはごく一時的だ、ということです。主が懲らしめとして罰を与えられるかもしれないが、その後に出てくる義と平和は永続するものだ、ということです。私たちが罪から離れるように、むしろ一時期、罪からくる悲しみを知ってもらうのです。

8 モーセは急いで地にひざまずき、ひれ伏した。9 彼は言った。「ああ、主よ。もし私がみこころにかなっているのでしたら、どうか主が私たちのただ中にいて、進んでくださいますように。確かに、この民はうなじを固くする民ですが、どうか私たちの咎と罪を赦し、私たちをご自分の所有としてくださいますように。」

モーセは、神の寛容に圧倒されました。それで、地にひざまずき伏し拝んでいます。そして、民が確かにうなじを固くする民であると告白しています。主の慈愛に触れるときに、人は初めて自分の罪を認め、悔い改めに導かれます。

3A 主の再契約 10－28

そして主は本格的に、ご自分の契約を再度結んでくださいます。

1C 住民との契約 10－17

10 主は言われた。「今ここで、わたしは契約を結ぼう。わたしは、あなたの民がみないるところで、地のどこにおいても、また、どの国においても、かつてなされたことがない奇しいことを行う。あなたがそのただ中にいるこの民はみな、【主】のわざを見る。わたしがあなたとともに行うことは恐るべきことである。

主が約束の地で共におられるだけでなく、他の国々の見ているところで、かつてない奇しいことを行われると約束してくださっています。主が、民の間におられるということは、それは恵みであり、そして畏れ多きことです。そこで、金の子牛事件であったような過ちを犯してはいけないことを警告されます。今回は、荒野の旅において過去のエジプト生活を想い出したのですが、次には新たに、神を知らない住民が周りにいることになり、新たな誘惑になるのです。

11 わたしが今日あなたに命じることを守れ。見よ、わたしは、アモリ人、カナン人、ヒッタイト人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人を、あなたの前から追い払う。12 あなたは、あなたが入って行くその地の住民と契約を結ばないように注意せよ。それがあなたのただ中で罠とならないようにするためだ。13 いや、あなたがたは彼らの祭壇を打ち壊し、彼らの石の柱を打ち砕き、アシェラ像を切り倒さなければならない。14 あなたは、ほかの神を拝んではならない。【主】は、その名がねたみであり、ねたみの神であるから。

主は今、イスラエルと契約を結ばれますが、彼らが約束の地に入ったときに、現地の者たちと契約を結んではならない、と命じておられます。これは、彼らの価値観や習慣やしきたりに同調することはないように、と言い換えることができるでしょう。その時はことさら悪いもののように見えないかもしれませんが、後に罠になるのだということです。だから、むしろそういった偶像は生活の中から取り除かないといけません。パウロは、世に同調していたコリントにある教会に対して、こう戒めました。「Ⅱコリ 6:14 不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。」

主はさらに、ご自身がねたむ神であると言われています。これは、契約の神、一対一の神と言ったらよいでしょう。夫婦が一対一の契約であり、他に何物をもその間に入らないと決めたからこそ、そこにある愛があります。その愛があるからこそ、他の人々に証しを立てることができ、周囲の人々がここに主がおられると知ることができるのです。

15 あなたはその地の住民と契約を結ばないようにせよ。彼らは自分たちの神々と淫行をし、自分たちの神々にいけにえを献げ、あなたを招く。あなたは、そのいけにえを食べるようになる。16 彼らの娘たちをあなたの息子たちの妻とするなら、その娘たちは自分たちの神々と淫行を行い、あなたの息子たちに自分たちの神々と淫行を行わせるようになる。17 あなたは、自分のために鋳物の神々を造ってはならない。

13 節に「アシェラ像」とありますが、カナン人の豊穣の女神です。ですから、淫らなことをするのと偶像礼拝が密接に結びついていました。このような形で、釣り合わない頸木を共にするということは、自らを欲望の奴隷へと陥れてしまいます。「コロ 3:5 ですから、地にあるからだの部分、すなわち、淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝です。」

2C 主への三大祭り 18－26

このようにして異教の神々、偶像礼拝、そういった貪りから離れなさいと命じておられますが、今度は、主ご自身に対する祭りを盛んにしなさい、その新たな習慣の中で生きて行きなさい、ということです。私たちが、生活の中でイエス様中心、そして教会中心で生きていくことの必要性はこれです。周囲の価値観や習慣と交じらない方法は、主との交わりを深めることにあります。

18 あなたは種なしパンの祭りを守らなければならない。アビブの月の定められた時に七日間、わたしが命じた種なしパンを食べる。あなたはアビブの月にエジプトを出たからである。

これは、過越の祭りとそれに続く、種なしパンの祝いです。「アビブの月」とありますが、アビブは「大麦の穂」という意味で、3 月終わりから 4 月にかける時期です。その 14 日に過越の祭り、それから七日間は、種なしパンに祝いです。そこで、彼らはエジプトから出てきたことを祝います。私た

ちは、キリストが血を流され、体が裂かれたことを記念しますね。

19 最初に胎を開くものはすべて、わたしのものである。あなたの家畜の雄の初子はみな、牛も羊もそうである。20 ただし、ろばの初子は羊で贖わなければならない。もし贖わないなら、その首を折る。また、あなたの息子のうち長子はみな、贖わなければならない。だれも、何も持たずに、わたしの前に出てはならない。

エジプトから脱出するときに、過越の祭りについての教えに加えて、初子は主ご自身のものであることを教えておられました。それは、主が、エジプトにご自分の使いを送られた時に、イスラエルの長子、また家畜の初子を救い、他のエジプト人の長子や初子は殺したからです。そうやって、贖い出されたものなのだから、それは主の所有のものなのだということです。私たちは、イスラエルの民が神にとって初子とみなされていたように、私たちも神にとって所有の民とみなされています。ですから、自分はもはや自分自身のものではなく、神の聖霊のものなのです。「Ⅱコリ 6:19-20 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。」

21 あなたは六日間は働き、七日目には休まなければならない。耕作の時にも刈り入れの時にも、休まなければならない。

安息日を定められました。いつもの時もそうですが、特に祭りの時には、主は意識して休まれることを命じておられました。祭りは、収穫祭ですが、そういった時に休むのはどうなのかな？と心配になるかもしれません。けれども、主が収穫を与えられているのですから、だからこそ主に捧げるのです。これは、私たちにも当てはまるでしょう、仕事が与えられているのは主によります、だからこそ、礼拝をより一層、大切にします。仕事があるから礼拝に来なくなるというのは、本末転倒です。

22 小麦の刈り入れの初穂のためには七週の祭りを、年の変わり目には収穫祭を行わなければならない。

初めが五旬節のことで、五月頃に祝うものです。そして「年の変わり目」というのは、「ラッパを吹き鳴らす日」のことで、そこで新年が始まります。九月です。その月の十五日に仮庵の祭りを祝います。レビ記 23 章に、これらの祭りについて詳しいことが書き記されています。

23 年に三度、男子はみな、イスラエルの神、【主】、主の前に出なければならない。24 わたしがあなたの前から異邦の民を追い出し、あなたの国境を広げるので、あなたが年に三度、あなたの神、【主】の前に出ようとして上って行くときも、あなたの地を欲しがる者はだれもいない。

年に三度は、成年男子はこれらの祭りに集います。ですから、聖霊が降った時に、世界中からユダヤ人たちが集まっていたのは、これゆえです。過越の祭りにおいて、イエス様が十字架に付けられた話しは、世界に離散していたユダヤ人たちの間に話は広まっていたのです。彼らはエルサレムに集まっていたからです。

安息日と同じように、収穫時に、祭りに参加することはリスクを伴います。その間に敵によって、作物を荒らされたらどうするのか？と心配ですが、主が心配してくださることを教えています。私たちも、主の命令を行うにあたって、いつも、「神の国とその義を第一に求めなさい。」と心に留めておかなければいけません。

25 わたしへのいけにえの血を、種入りのパンに添えて献げてはならない。また、過越の祭りのいけにえを朝まで残しておいてはならない。26 あなたの土地から取れる初穂の最上のものを、あなたの神、【主】の家に持って来なければならない。あなたは子やぎをその母の乳で煮てはならない。 」

ここでは過越の祭りにおける規定です。種入りのパンを食べてはいけない事、それから、いけにえは朝まで残してはいけない事。これは、キリストが流された血によって、すべての罪が赦され、取り除かれたことを意味しており、いけにを示しているキリストの体は、安息日に入る前に、夜になる前に取り下ろされることを示していたからです。そして、土地から取れるものは最上もののです、残りのものではありません。ですから、いかに礼拝が生活で第一のものになっていなければいけないかが、よく分かります。

そして不思議な規定が、「あなたは子やぎをその母の乳で煮てはならない」というものです。おそらく周囲のカナン人の慣わしに、このようなものがあったのかもしれません。けれども、いけにえにされるような家畜とて、このような残酷な仕打ちはしてはいけない、真似してはならないという掟です。ちなみに、ユダヤ教の食物規定は、ここを拡大解釈して、肉製品と乳製品を共に食してはいけないとしました。それで、今もイスラエル料理は厳格です。しかし、アブラハムのことを思い出してください。旅人に対して、子羊を屠ってだし、さらに凝乳も出しています。主の使いである旅人に、肉製品と乳製品を同時に出しているのです。

3C ご臨在に触れたモーセ 27－28

27 【主】はモーセに言われた。「これらのことばを書き記せ。わたしは、これらのことばによって、あなたと、そしてイスラエルと契約を結んだからである。」28 モーセはそこに四十日四十夜、【主】とともにいた。彼はパンも食べず、水も飲まなかった。そして、石の板に契約のことば、十のことばを書き記した。

モーセは前回と同じように、40 日間、シナイ山の上にいました。主がそこでおられる中で、彼はこれらのことばを書き記し、石の板には十戒を書き記しました。

4A 顔からの輝き 29－35

29 それから、モーセはシナイ山から下りて来た。モーセが山を下りて来たとき、その手に二枚のさとしの板を持っていた。モーセは、主と話したために自分の顔の肌が輝きを放っているのを知らなかった。30 アロンと、イスラエルの子らはみなモーセを見た。なんと、彼の顔の肌は輝きを放っていた。それで彼らは彼に近づくのを恐れた。31 モーセが彼らを呼び寄せると、アロンと、会衆の上に立つ族長はみな彼のところに戻って来た。モーセは彼らに話しかけた。32 それから、イスラエルの子らはみな近寄って来た。彼は【主】がシナイ山で告げられたことを、ことごとく彼らに命じた。

なんと、モーセの顔が輝いていました。四十日の間、彼は主の栄光を、その一部でありながら見続けていたからです。彼は主の栄光を反映していました。これが、神との交わりを持つことの意義です。私たちが神の栄光を反映することができる、ということです。そして、他の人々がその輝きを直視することができませんでした。モーセは神を直視することができませんでしたが、神の一部の栄光に触れた者の、その反映さえ直視することができなかったのです。これは霊的にも同じです。主の栄光に触れられた人を、肉の中にいる人々は煙たがります。直視することができません。

33 モーセは彼らと語り終えると、 顔に覆いを掛けた。34 モーセが主と語るために【主】の前に行くとき、彼はその覆いを外に出て来るまで外していた。 外に出て来ると、 命じられたことをイスラエルの子らに告げた。35 イスラエルの子らがモーセの顔を見ると、モーセの顔の肌は輝きを放っていた。 モーセは、 主と語るために入って行くまで、 自分の顔に再び覆いを掛けるのを常としていた。

ここに、「隔て」という限界が旧約の時代には存在することを教えています。幕屋が多くの覆いによって、神の栄光と人との間に隔てを作ったのと同じように、モーセの顔にある神の栄光にも隔てを造らねばならなかったのです。

この話を使徒パウロはじっくりと、コリント第二 3 章において行っています。彼は、旧約時代における奉仕と、新約の奉仕を比べて、後者がはるかに優れていることを述べました。モーセが伝えたのは、石の板に書かれた文字であるのに対して、私たちは御霊の言葉を伝えています。モーセが伝えていたのは、律法に違反する者は死であると宣言していたのに対して、私たちは復活の命を伝えます。そして、モーセの顔の覆いについても教えます。そこに物理的な隔てがありましたが、実は、心の中にも覆いがかぶさっていると教えました。キリストが既に来られたにも関わらず、当時のユダヤ人は会堂において、そのキリストの預言を聞いても悟ることがありませんでした。その

思いに覆いがかけられているのです。

また、実は覆いにはもう一つの目的がありました。モーセの顔の輝きはしばらくすれば消えていたのです。正確にいうと、民がモーセが御言葉を語る時にその輝きを見なくてもよいようにということではなく、実はその中で顔に輝きが消えていくことを見せないために、覆いを付け続けたとのことです。同じように、古い契約は消え去り、新しい契約に取って代わったのに、それをいつまでも持ち続けているのはユダヤ人たちだ、ということです。

けれども、新しい契約には希望があります。主の御霊が、その覆いを取り除けてくれるのです。「Ⅱコリ 3:16-18 しかし、人が主に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。17 主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。18 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」新約におけるすばらしい御霊の働きです。私たちが必要なのは主に向くことだけです。そうすれば、主が私たちの心にある覆いを取り除けてくださいます。それだけでなく、モーセの栄光は消えていきましたが、私たちに与えられているキリストの栄光は、輝きを増すだけです。